の末は、維新に際して、明治政府の廃藩をまたずに藩をやめたことでも知られている。

この狭山において町史編纂がおこなわれることを聞いてから、かなり久しい年月がたっており、私共はその上梓の日を鶴首していたのであるが、昨年、まず第二巻史料編を刊行された。末永雅雄、井上薫、山口之夫、福島雅蔵の諸氏が編纂にあたられたにふさわしいすぐれた史料集が世に送りだされたことを喜び、若干、内容を紹介したいと考える。

本文の史料は二六五点、五一四頁、古代、中世、近世、近代の三部にわけ、とくに史料の豊富な近世については、総記、土地、貢租、村政、戸口、水利、土木、産業、狭山藩、狭山藩領、寺社、銘記の一二項にわかって、主要な史料を採録されている。これらは、いずれも興味深いものであるが、なかでも「中林家累代日記」（総記）は、文明二年～明治十年とあり、ここでは天正十一年より収載されていて簡単な記述であるが注目すべきものが多い。明細帳は六カ村のそれが収められ、内容は詳細である。「村政」では、摂河泉地方に多発した村役人不帰依一件文書が含まれ、「水利」「土木」では狭山池関係の注目すべき史料があり、産業には菜種油絞業、天満青物市関係のものがある。また「狭山藩」では税敛法とある貢租収納に関する詳細な文書や狭山藩公辺諸向手控、旧狭山藩記事書類などが収められている。

したがって、本史料集は、近世における最も先進的な商品生産地帯の情況を知る上での重要な参考文献となるであろうし、また狭山池用水の慣行や、畿内小藩としての狭山藩藩政を研究するのに、すぐれた手がかりを与えるものと考える。

なお、本書には、本文につづいて一〇七項におよぶ図版が付け加えられている。ここに含まれた数百枚の写真は、いずれも鮮明なものであり、考古学遺物、古文書、民俗行事、産業資料、景観など、多種多方面にわたっている。それは町の歴史をより身近のものとしており、本書の特色としてあげることができよう。

関係者の御努力に敬意を表し、狭山町史第一巻本文編の刊行の早からんことを期待しつつ簡単な紹介の筆をおきたい。

（A5判本文五一四頁　図版一〇七　昭和四十一年四月　狭山町刊）　（脇田　修）

箕面市史　第一・二巻

北摂の中央に位置する箕面市は旧箕面村・萱野村・豊川村・止々呂美村などを母体として成立し、市域には厖大な史料を有する応頂山勝尾寺があるところから、市史の編纂が早くからのぞまれていた。昭和三九年暮に古代・中世篇として第一巻がまとまり、昨年近世篇の第二巻が出された。

第一巻は第一章原始・古代の箕面のうち、主として考古学的面を藤沢一夫氏、文献学的面を末中哲夫氏が担当し、第二章中世の箕面のうち勝尾寺文書を中心とした中世全体の動きを戸田芳実氏、文化財の面を佐和隆研・藤井直正・藤沢一夫諸氏が分担している。原始・古代の遺跡・遺物については箕面市域のものが網羅してあるほか、周辺のそれについても関連的にとりあげられているので、北摂全体の様子を知る上で便ならしめている。三〇〇頁にのぼる中世の政治・社会・経済史は、ほとんど勝尾寺文書によっており、本巻の中心部分といっていいだろう。同文書の豊富なことは記述に便利である反面、ともすれば史料的にかたよ

って勝尾寺の歴史となるおそれがあるが、それをできるだけ避け、勝尾寺と周辺村落とを関連づけながらこの地域の中世の展開をあきらかにすることに成功している。また、中世の勝尾寺領が現市域のかなりの部分を占め、この山間寺院を中心としてこの地域の中世史が展開したことから考えれば、勝尾寺文書を中心にみていくこともまた当をえているといえよう。とりわけ興味深いのは、勝尾寺が地頭職をもった高山庄をめぐる勝尾寺と領家浄土寺門跡、在地領主高山氏などとの争いで、のちの戦国大名高山氏の成長過程も追及されている。中世の文化財としては、めずらしい八天之石蔵の勝示遺構が詳細に紹介されており、貴重な調査報告といえよう。

第二巻は島田龍雄・末中哲夫・藤本篤ら諸氏が分担し、太閤検地から江戸幕府の倒壊までの政治・経済・文化にわたり、近世地方文書をたんねんに駆使して記述されている。この巻では山林・水利や西国街道瀬川宿などにかなりの部分がさかれており、入会慣行・争論・交通制度などについて興味深い事実が多い。中世以来の寺領山林をめぐって、近世に抬頭してきた小農民たちと寺院との間におこる山論は興味をそそる。全体としていえば一巻と二巻との連結に必要な織豊政権成立にいたる戦国期の記述が若干弱くなっているが、それを望むのは史料的な制約を無視したないものねだりであろうか。

箕面市ではひきつづいて目下史料篇刊行の準備が進められ、本年度中に史料篇の一、以下一年一冊の目標で史料篇の二、三がまとめられ、その後に本篇の近・現代篇がつくられる予定である。勝尾寺文書については、かつて大阪府が計画し、第一巻を出したのみで刊行を中断したいきさつがあり、今度箕面市によって大規模にその業がなされることは、歴史学界に大きな貢献をなすものとして大いに期待される。

（A5判　第一巻五一四頁　昭和三九年一二月　第二巻五四九頁　昭和四十一年三月　箕面市刊）

（松尾　寿）

新修島根県史　史料篇

島根県――出雲、石見国といえば、原始の昔から、古代、中世、近世、近代を通じて、それぞれの時代の特質に応じて独自な役割をはたしてきた地方である。昭和五年、『島根県史』が完成し、その歴史解明の基本文献として利用されてきたが、これを抜本的に大改訂する仕事が昭和三十五年いらい進められ、主幹田村清三郎、編纂員中村一介（近代）、河井忠親（古代、近世）、勝田勝年（中世）諸氏によって編纂されていた史料篇六冊（古代中世・近世上下・近代上中下）がこのほど完成し、多くの新史料と、研究者の利用しやすいよう数々の配慮を加えられて、学界に提供されている。以下古代中世篇を中心に紹介しよう。

まず古代は、六国史、類聚国史以下諸史料・文書の島根県関係の抄録及び日御碕神社蔵の出雲国風土記全文（校訂加藤義成氏）を掲載する。中世は、千家、北島家、日御碕神社、鰐淵寺、雲樹寺をはじめ、出雲国五〇家、石見国三二家、隠岐四家及び萩藩閥閲録など県外三件全一一七七通を収めている。これら文書は、一々例示するまでもなく、たんに北陽の一地方史にとどまるものでなく、ひろく中世の政治・経済・文化の根本史料として利用されてきたものが多数にのぼる。旧県史も、文書・記録を